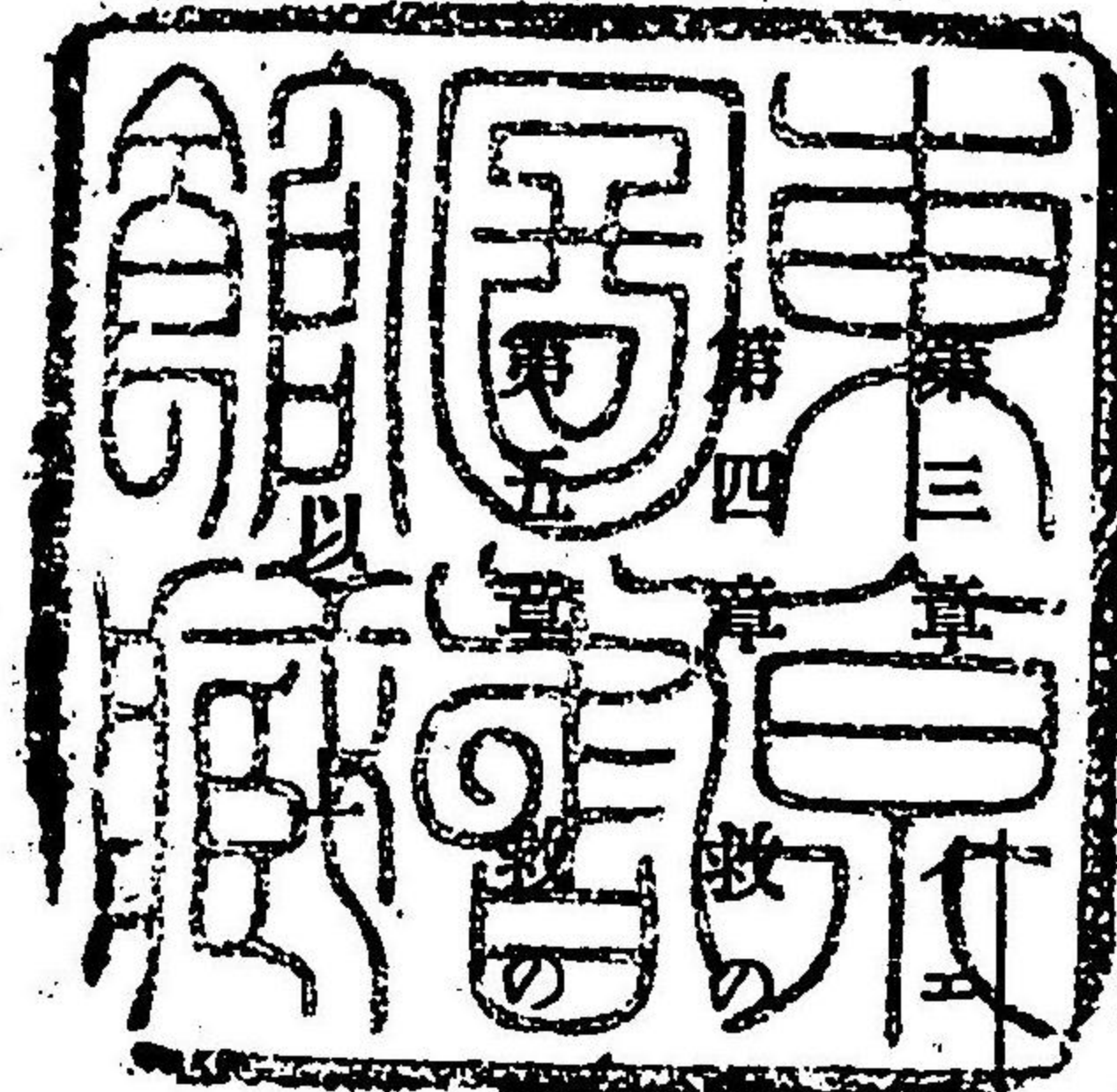


村田素軒著

叛之奧義

福音社發兌

特46
891



第三章
救の
義
第四章
救の
義
第五章
救の
義
生涯

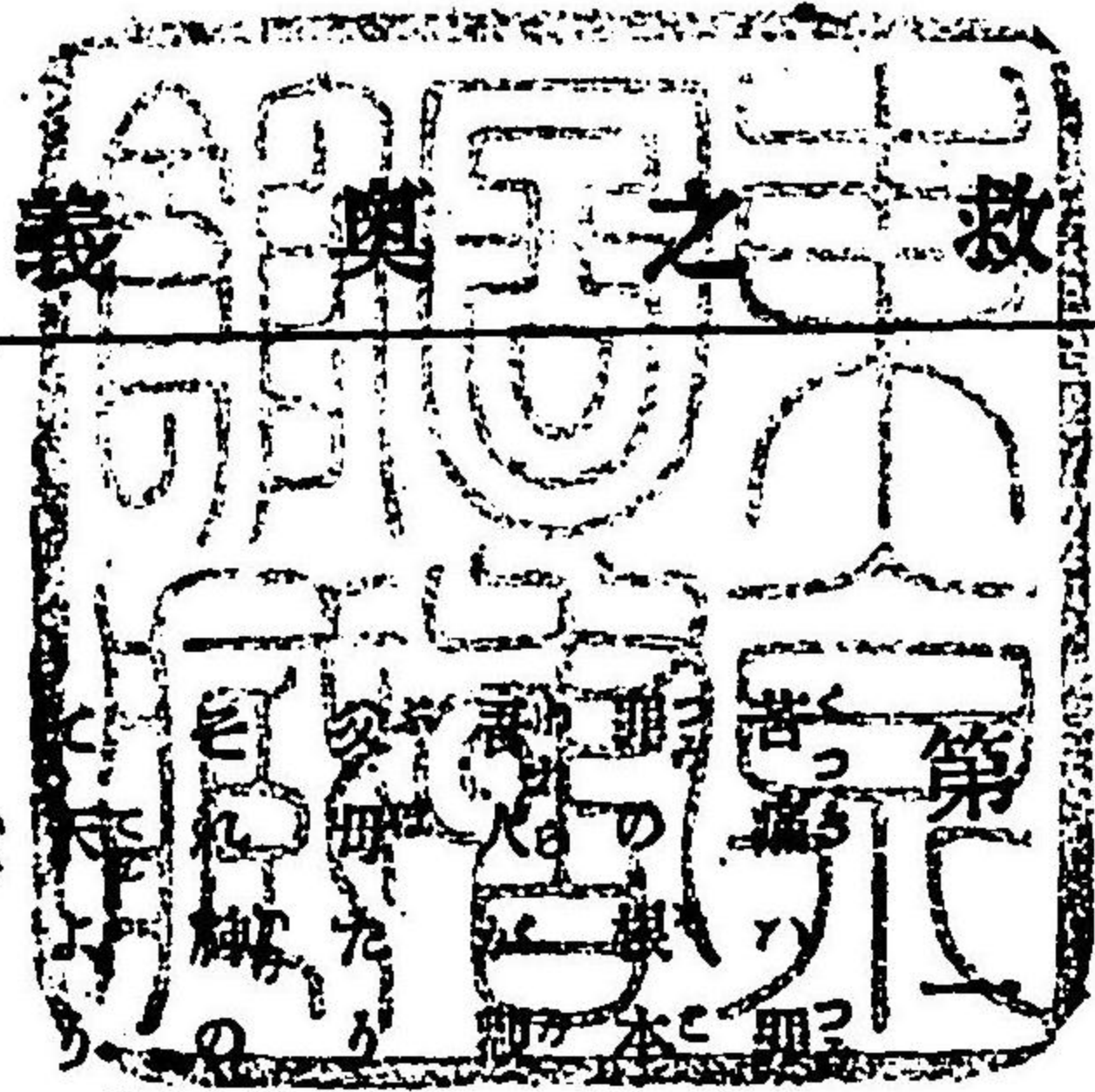
第一章 人間の罪惡
第二章 天父の恩愛

目録



救之奥義

村田素軒著



第一章 人間の罪惡

の結果なり、
の神より離るゝに在り
ル—テル

る所、若し正當ならば何れの時に在りても罪の悲慘の
しなり、今も然り後も又然らん、カ—ライル
怒の不義をもて眞理を抑る人々の凡の不虔不義に向
て、蓋人の知るべき所の神の事情は、人に顯明にして既
に神これを人に顯し給へばなり、それ人の見ることを得ざる神
の永能と其神性とを造られたる物により、創世より以來と
り得て明かに見べし、是故に人々推諉べきやうなし、既に神を知

救之奥義

りて尙これと神と崇めず亦謝することとをせず反て其思念を乱
 し其恐なる心蒙味なれり自ら智と稱へて愚魯なる者となり朽
 壞ざる神の榮光を變て朽壞べき人たよび禽獸昆蟲の像に似す
 是故に神の彼等を其心の怨を縱肆にするに任せて互に其身を
 辱しむる汚穢に付せり彼等の神の眞を易へて偽りとなし造物
 主よりも受造物を崇奉りて之れに事ふ神の永遠頌美べきもの
 なりアーメン

閑靜なる春の日は山の頂に登り見よ天の蒼々として之を
 仰げバ愈々高く地の悠悠として眺遙かよ遠き山の紅霞を
 纏ひ近き丘陵の紫韻を被りぬ十里の田畑或の菜花の黄金
 に似たるもあり或の碎米菜の緋毛氈も似たるあり或の微
 風に揺らるる綴麥の大洋の波浪も類するあり蜂蝶翩翩と
 して追ひつ追われつ花より花に枝より枝も飛び戯むる

救之奥義

愉快の様子諭へんに物なし洋々として期かある音楽の天
 下聴ゆるの實に舌まめなる雲雀あり此の如き小鳥すら其
 蜜を吸集むるのを天職と思ひ蝶人の花を粉を樂とし蜂は花
 ら雄雌の蕊の媒約人とあひる人花を粉を樂とし蜂は花
 善美の稱ひの蝶人とあひる人花を粉を樂とし蜂は花
 利へ親の友よべの害及ばし社會よ毒を流すものたるの
 昆蟲小禽の學ぶ所の最中雪を凌ぎし梅の香も何時しか消
 ぬも温かある春の詠じけん

みわたせば古人の詠じけん
 都を春の錦なりける

救之奥義

の景色あれ、老姫の孫の手をとりて、野邊に嫁菜をつみに
出で、富める家の隠居の僕に折詰と瓢持たせて花見に行き、
花よ負けぬ氣の美々しき装しつ、ヒラリと軽車よ打乗りて
朱門を出し、大家の嬢様が、野花よ戯むる、双蝶を見て、人知
れず紅葉を散らす可愛さよ、顔よ手習したる農家の兒等が
紙鳶打揚げて笑ひ興する可笑さよ、見るもの聞く物一とし
て樂しからざるのなし、實に西洋の詩の句よいはゆる
いと朗かにいと靜かに又いと輝ける好天氣

今日の天地も婚姻の祝をすらん
の有様なり、罪何の邊にか潜める、悪何れの處よか蟠まれる
人の花の如く、花の人の如く、山よ水に紅の袂を見ぬ隈なく、
歡樂の聲を聞かぬ里ぞなき、青の春の常色か、歡喜の人の

救之奥義

心なるか、否とよ否とよ此の唯表面の事のみ、此の唯一時の
事のみ、花の朝よも病の瘳よ色青ざめて唸き居るもの幾何
ぞ、死の會釋かく深宮の門を叩き、涙の程なく花嫁の臉を濕
す、虚言のまだ幼けなき薔薇の唇より發し、怨惡の念の早く
も蕾の如き小女の胸よ生じ、嫉妬は恠氣深き婦人にあるの
みか、賢と不肖を問はず、貴賤尊卑の別なく、人の心に根差
す事の深き、蓋し嫉妬より甚だしきのかし、美のしき娘に懸
想し、色男よ秋波を送るなどの、浮かれ三味の愚か、妻あらぬ
妻を妻とし、夫あらぬ夫を夫とし、二人三人のみか夜な夜な
枕を更ふる姦婦淫女、之を娼妓と云ひ、藝妓と名けて、人も之
を可しとし、自らも之を得たりとし、政府も公けよ之を許し
て置かねばならぬしたら、而も貴顯の宴、職事の席、此人非人

救之奥義

を招かざれば、貴顯方の顔よりも何とやら角がたち、相談の纏りも滑ならず、万が一お目よとまれれば、忽ち御坐敷の花と變じ、夫人と化して、黒塗馬車に倍す、ア、情慾の罪たる大よし、廣ひ哉、天此情を予へて、家の庭の本を開き、夫の愛を扶け、しめんとす、人の心、亂れ、又貪婪の慾、如き忌むべきものあり、人は盗人、明日の雨降、世の何人も當てよ、のからず、平生より、人はいくハ、云ふて出入するものも、矢張我より得る所あれば、なり、昔の馬が物言ふ鈴鹿の坂でと歌にうたひし、鈴鹿峠も、今の瀟車の中で足踏みのバシ居眠りしながら、通り行く事となりしが、此は全く文町の御蔭である、がシカシナガラ昔も今も西も東も變のらぬもの、御金の功德

救之奥義

封建の代こそ却て財産の保護が行届かず、戦争屢々起り、御金の取立、盜賊の流行など甚だしく、其上金を増値す道、今の様よ自由ならずしが、今とかりて、金の物言ふ世の中、貸借の親もなくなり、子もなし、サテ自分も若き頃よの酒を無闇に飲み、女にも馬鹿に金入れし事ありしが、四十人のし、まゝり時、是から一番金の發生る木を我家に植へ付け、天晴の家産を積み、みて見たしと、頼み、縦皺を寄せ、十露盤を臂よ、杖いで、怨深き阿爺の獨語、ア、貪婪の壯年以後の人の心に生じ、易く、男よりも女よ強し、世に鬼婆と云ふのツマリ邪慳なる強慾婆の謂なるべし、金の欲しさよ肩を潜め、色を改め、虚言を吐き、媚を呈し、義理を缺ぎ、人情に逆ひ、詐欺を謀り、偽造を爲し、甚だしきよ至ての養兒と偽つて之を殺し、又、其骨肉

救之奥義

氏め者依か此のり張苦人り
のしこの邪人の世而ら痛の
正人そ悪くのにししを慾
成の此に生の生まて而の生
よ愚上し命れ其のしみ活
りかなてのし果はて疾物
もなき人の一な遂病なり
賢り賢を杯の死にをり
かかに着土罪入り至に争み
し伯しし一に縷にテる闘て
か夷て世の沈まの生を
慾よ忠義欺をん人の罪み
をり節操て以がのに涙の
よ盗の榮耀終にをて雨孕
し罪は爲耀終にをて雨孕
を幸福一華をせのし悲
ぬなり其の盡も渡ん悪血
のし身しのるがにの生
眞かをたかあ爲充川生
の尊苦る奸るよてをみ

救之奥義

快樂なりや、非ざる事能く
然るに或人曰く、吾幼きときより罪を犯せし事なし、殺人、盜、
姦淫、争闘、等を爲せし覺あさひ、勿論、國法の一點一畫も觸
れし事なく、貧を恵み弱きを助け、神々の祭禮もも怠りし事
曾てなしと、夫れキリスト教で謂ふ所の罪との法律の罪よ
非ず、内心の罪あり、女を見ても色欲を起すの姦淫も等し、人
惡み、嫉み、咀ふの悉く罪なり、而して高慢の罪の中、罪なり
天地の恩を蒙りあがら神の力よよりて生きたながら、其神を
忘れ、其神よ遠かりて、神ならぬ神を拜むの、大罪中の大罪あり

救之奥義

り、悪事を爲すの素より罪なれども、善事を爲さざるも亦全
じく罪なり、例へば孔子が義を見て移る能はざるを吾愛と
せし、此意なり、若し此等の罪心中に毫もなしと云ひ、其
人こそこの孔子よりも、ポロロよりも、釋迦よりも優れたる者
なり、世の法律や世間の習慣に照らして、自分の罪なきもの
と合点するの、理髮店の厚ガラスを眺めて、自分の色が白ろ
い、上男だと己惚れるが如し、磨き澄ました明鏡に向ふとき
の昔しの打傷、擦傷より黒子雀班の數までアリくとして
映るべし、又世人を見て彼の人も善人じや此人も親切家じ
やあど云ふの、丁度夜分に化粧した婦人を見るが如く、白晝
素面を見ると二度吃驚する事あり、遠目から見れば美しくし
く咲き揃ふ千万の櫻の花も、一輪毎よ手にとりて調ふれば

救之奥義

或の蟲のくひしあり、或の花の曲めるありて、扱も満足な
るの稀なり、十日餘りにして散り行く花さへ此如し、況して
情あり慾ありて、五十の年月を罪なく送る人のなきも、一應
道理と覺ゆれ、左のさりながら、人の生命の土や、煙や、水の泡
となりて消ゆべきものに非ず、現世の彼方よの猶輝ける光
明界あり、全能全智の神之を支配し、人の善悪義不義に關せ
ず、各々審判を受け、義者の永生を受け、不義者の窮なき苦痛
を受くべき事の何方から考へても尤も至極の事よて、何れ
の宗教も之を教へ、人間の本心も之と可とす、万一事なく
ば此世の眞黒暗なり、無茶苦茶あり、無法矢鱈なり、仁義も人
情も、義理も、蠻瓜もあるものかの世となり果つべき筈なり、
然るよ世の罪に沈みあがらも義を義とし、不義を不義とし、

救之奥義

伯夷の三千年の後よも賞められ、魯氏の小學の兒童にさへ
逆賊と呼ばれ、宗五郎の任侠、赤穂義士の忠、仙松の孝、誰れ知
らぬのなかるべし、シカシ思ひ回らせば世に隠れたる義
士、忠臣、孝子、善人、又顯のれざる悪人、毒婦多かるべし、こを
々々明かす審判すべきの神明なり、抑も來世審判の日に當り
て悔ゆるとも益なし、況んや人間眞正の快樂は、惡を去り
て善に移るに在るもの罪を己が強慾を離れて神と和むに在るもの
を、而して人に在るものを、己が強慾を離れて神と和むに在るもの
を、世の人の間に在るもの罪を己が強慾を離れて神と和むに在るもの
救の奥義を來れ、神と偕なる道、生、涯、は、と、幸、福、喜、樂、なるに在るもの
を、世の人の間に在るもの罪を己が強慾を離れて神と和むに在るもの
救の奥義を來れ、神と偕なる道、生、涯、は、と、幸、福、喜、樂、なるに在るもの

救之奥義

第二章

神の恩愛

もろくの天の神のいづくわをあらわし、穹蒼のその手のわ
さをしめす、この日ことばをかの日につたへ、このよ智識をかの
よにねくる、語らず、いはす、その聲きこざるに、そのひゞきの全
地にわたまねく、そのことばは地のはてにまでおよぶ、神のかしこ
に帷幄を日のためたまうけたまへり、日ハ新耶がいはひの殿を
いづるごとく、勇士がきそひはしるをよるこぶに似たり、そのい
でたつや天の涯よりし、そのめぐりゆくや天のはてにいたる物
としてその和煦をかうぶらざるハなし、詩篇十九篇
世人のいかなるものなればこれを聖念にとめたまふや、人の子
はいかなるものなればこれを顧みたまふや、只すこしく人を神
よりも卑つくりて榮と、尊貴とをかうぶらせ、またこれに手のわ
さを治めしめ、萬物をその足下におきたまへり、われらの主エホ

川よなんぢの名の地にまねくして辱きかな 詩篇第八篇

救之奥義

人として忘るべからざるもの報恩の念より大なるのな
し、又恩義に感ずるほど切なるのあし、人より恩を受けて之
を感せず、之を忘れて省みざるもの人にして人よ非すと
謂ふも過言よ非ざるべし、寒風府よ粟し雪花片々面を打つ
の薄暮、戶外に立つ乞食に向ひて一碗の粥を恵むとも、彼
あまた、び禮を述べて其厚意を謝すべし、予曾て豊後の山
中を旅行せし際、不圖途に迷ひしが、一人の農夫ありて懇ろ
に予を導きて溪水を渉り、更に一の捷徑を示し呉れたり、別
る、よ臨み篤く其意を謝し、金若干を與へんとしたれども
固辞して受けざりし、すでよ五年前の事なれども、予決して
其親切ある老人を忘れざるあり、夫れ報恩の美談古今の物

救之奥義

語に多く、又畜に人間に止まらざるなり、大馬、熊、鹿の類と雖
も往々恩に報ひし例あり、我國民道德の大本となり居たり
し、忠孝の道も之を推し詰めて考ふるとき、矢張報恩の念
より出來りしものなり、父母に孝養を盡すべき譯、身軀髪
膚を受けてより、以來十數年の久しき、暑き夏の日、冬の夜も
吾よ代りて苦を嘗め、勞を執り、乳を飲ませ、食を供へ、衣を調
へ、藝を仕込み、學校よまで通ひせて、終に一人前の男子女子
と仕上げ給ひたる、山よりも高く、海よりも深き、其御恩に報
ゆる心より出でしなり、又昔しの武臣が吾一死を鴻毛より
も輕しとして、何日何時でも君の馬前に擊死する覺悟を有
ちたりしも、本を質せば全玄く恩義に答へ奉る精神より發
せしあり、左れば恩義に感玄恩義よ報ゆるの念、忠臣孝子

救之奥義

の心にして取も直さず人間の本分あり我々日本人の殊更
此念厚く之を大にして忠孝の大義より之を小にしての益
正月の禮物の遣取朝夕の挨拶に至るまで殆ど毛すぢほど
の抜目もかし左なり毛すぢほどの抜目のかかれども富士
山より大地なる抜目あり何ぞや天地の鴻恩を忘る玉ふ全
是なり天地を造り萬物を育し我々人類を支配なし玉ふ全
能全智の神の鴻恩少しも禮を述べず又有難くも思ひで
ウカく此世を送る事なり我邦の學者貝原益軒先生も此
事に就て左の如く云われたり、
人となるもの天地を以て大父母とする故父母の恩を
受くるが如くきはまりなき天地の恩を受たり天地のめ
ぐみにて生れたる恩のみならず身を終るまで天地のや

救之奥義

しなひをうくる事たとへば人の身の父母よりひまれて
後も父母のやしなひによりてひとなるが如しこを
以て此世にひまれてのつねに天地につかぬ奉りいかに
もして天地の恩をむくいん事を思ふべし是天地につか
ふる孝あり人たる者のつねは是を心にかけてわするべ
からず天地につかへ奉る道は別にあらず天地の御心に
したがふを以て道とす天地の御心にしたがふとの我に
天地より生れ付たる仁愛の徳をうしあひすして天地の
生る所の人倫をあつくあはれみうやまふをいふ是則人
の行ふべき所よして人の道なり人の道とする所さらよ
此外あるべからず夫人の天地のめぐみによりてひま
れ天地の心をうけて心とし天地の内すみ天地のやし

救之奥義

なひをうけたり、かくのごとく極りなき大恩をうけたれども、凡人のしらす、所謂百姓の日々も用ひてしらざるなり、然るに天地につかへ奉らずして人欲にしたがひ、天理よししたがのざるの、天地の大恩をかうふりて天地をそむく故、天地の子として大不孝なり、人の子として其親を愛せずして、他人を愛し父母をそむきて不孝を行ふがごとし、不孝の子の其身を天地の内よ立がたし、いはんや天地の子として天地をそむき、不孝なるをや、幸にして、わざはひなしといへども、天地にそむけるとが、おそるべし、天地をたふとびつかへ奉るべき事、前よもすでよいへれど、返すくよく人につけんため、全じ事をいくたびもくりかへしていふなり、猶此後にもいふべし、およそ天の人の

救之奥義

始なり、父母の人の本なり、人の天地を以て大父母とし、父母を以て小天地とす、天地の父母、其恩いと、故に天地につかへて仁を行なふ事、父母につかへて孝を行ふが如くすべし、益軒先生のキリスト信者よ非ざれども、其言ふ所實は眞神の教に適ふ所多し、扱て讀者の申さる、ならん、我等決して神の恩を忘れず、朝夕な神佛、日月、先祖等に禮拜しつゝ、あるなりと、夫れ先祖も均しく人間なり、日月の神が天地を照す爲に造り置かれしものなり、世の神佛の皆偽りの目標なり、譬へば或友より佳き品物を送られたりとして、其家に往きて主人よの一言の禮をも述べずして、柱を拜み、ランプを拜み、犬や猫に、禮を言ふが如し、御門違も亦甚だしからずや、ホ

救之奥義

一ロが朽壞さる神の榮光を變て朽壞べき人および禽獸、昆蟲の像に似ず、彼等の神の眞を易て偽とみし、造物主よりも受物造を崇奉りて之より事ふ、神の永遠頌美べきものなりア
「メン」と言ひしも此意と知るべし、夫れ神の天地の主宰にして人間の父なり、神の恩恵深き御方にして日を善き者に
も惡しきものにも照らし、雨を義しき者にも義しからざる
ものよも降し玉へり、人獨り其恩を覺らざるの何故ぞや、天
も、地も、草も、木も、鳥も、獸も、皆神の榮光を示さるの故、萬
物の靈長たる人よして榮光の神をさへ忘るゝの何故ぞや
是れ全く罪の致す所あり、人が罪をして神を背き神を忘れしめ
たるもの罪なり、人の己が罪によりて父ある神よ遠かり
神に遠かる事よよりて益々大罪に陥り、遂に滔々たる人類

救之奥義

を擧げて悲惨と暗黒の中に入りしめんとす、而して神と人との間に、天地の離隔ありて、罪惡の妖雲之を遮ぎり、子々孫々相續ぎて墮落を極む、人が天地の大父母を全く忘るゝに至りしも、亦豈止むを得んや、目あれども見へず、耳あれども聞へず、心あれども天父の聖恩を感覺すること能はず、然りと雖も天の人に賦與せし良心、本性、悉く滅すべからず
諺に云へる如く、盲者の視るを忘れず、跛者の起つを忘れず、目朦ながら見んと欲す、故に熾燭の光を以て天地の光と目朦ながら見んと欲す、故に熾燭の光を以て天地の光と誤り、手大能の力を受け得ずとも、木や石に向ひて其信仰を込め、其心暗昧さが故に眞神を覺り得ずして、偽の神を拜すが、嗟呼々々罪に沈みし人、たとひ眞神の鴻恩を忘るゝとも、鹿が谿水を慕ふが如く、神を慕ふの天性の破るべからず、身の

義 奧 之 救

々地こり夫そ玉愛によ子等し
 の間と既れへ今道人供の然
 流の能よ人りやな問な滅ら
 人人の天の即顯しをり亡バ
 獨類す命此のちの救救親を則
 りの千なり世万るはふと喜ち
 其皆金りよ國其天能しび之
 始天の故生民愛よのて玉を
 な父富よるののりす子ふ如
 からの支配もの天イよさバをか父
 んや誰れか玉ふ一子も此のり
 人間の首祖を造りし
 大河も湖れバ涓
 造るに足らず天
 寸陰も延バす
 去るも亦天命な
 是れ我よを而神を
 傾々救しあ憤
 の々ひてりる
 中玉天人の餘
 よ父ふ地の餘
 降のの人の神り
 り至他共の彼

義 奧 之 救

所如目迦をれ他り史宗した
 謂きよも呼とに無か教正と
 聖のり賢べも罪情りのをひ
 賢み視はと天あの人數勸穢
 の之て即も朗る天が多め悪
 只を聖ち地々友地罪し邪の
 教彼と賢冷とのののとを谷
 はの見あ々くし身有苦雖難間
 る蒼ゆりとて代情痛もすに
 べ天るとし人りのよ要る落
 きよの雖て間と人りす良つ
 の比恰も徒をなを免る心る
 途ふも矢ら嘲る慰かにのと
 をれ富張にけ事むれ皆聲も
 示バ士罪廣る能べん人の義
 し其山性しがのか事間消を
 て低のあ孔如すらをかす義
 自き群る子く天す泣天べと
 らと獄人にも地に自願父かし
 救幾よ間ツを向らすをら不
 ふ何りなク逼て罪る尋す義
 のぞ秀りヲ歴救あのぬ古を
 權やづ凡トりをる結る今不
 威世る人もて求人果の東義
 なのがの釋助ひのあ歴西と

救之奥義

去りながら以上述べし如き事例の誠に曉天に星を數ふるが如し、仁人も君子も學者も智者もツマリ世人を罪惡より救ふこと能はず、神の數千年待ち玉へり、而して終は獨愛子イエスキリストを降し玉へり、聖書は曰く
それ神のその生みたまへる獨子を賜はどに世の人を愛し玉へり、此の凡て彼を信する者に亡ることなくして永生を受けしめんが爲なり、神の其子を世に遣し玉へるの世の罪を定めんとよあらず、彼に由りて世を救んがためなり、
嗚呼廣大なる哉、天父の恩愛、而してその恩愛の深く且大なる事、即ちイエスキリストは由りて人間に顯はれし天父の心を知らんと欲せば、キリストを知るに若くはなし、人若し

救之奥義

キリストの心を知りて之は事へ之を信じなば救はるべし、キリスト明かにのたまわく
父の我に萬物を予へたまへり、父の外に子を識ものなくまた子および子の顯す所の者の外に父を識者なし、凡そ子を見て之を信する者の永生を得また之を末の日に甦らすべし、
と夫れキリストの救の奥義なり、此奥義を悟るもの幸なる哉、

第三章 キリストの聖業

天地の間人はど貴きものなし、自治自由の精神を有するもの唯人なり、開發窮りなき智力を具ふるもの唯人なり

救之奥義

神に肯奉るべき徳性を有するもの唯人なり、詩篇に曰く
神の人を只少しく天使よりも卑く造り、之に榮と尊貴とを
予へて御手のわざを治めしめ給ふと、今夫れ學問藝術の進
歩よりもるくの發明などを思へ、奇智、妙想殆ど造化の功
と競はんとするものあり、況んや美味、珍寶を世界のはし々
々より輻輳めて、天人の如き愈快なる生活をなしつゝ、ある
バリやロンドンの貴顯豪商などの有様を見よ、人間の力も
随分偉大ならずや、人の万物の靈長なり、神の最も愛し玉ふ
ものなり、若し人をして神を畏れ同胞を愛し而して万物に
長たらしめば天使が曾て歌ひし
至高き處よの榮光神にあれ、地よの平穩人への恩恵あれ
との御意の此世に行はれたりしならん、哀しき哉人その天

救之奥義

賦の自由と智力を亂用して神命に背き罪惡に陥れり、故に
學問藝術進むと雖も、文明の恩澤加はると雖も、美味口よ飽
き暖衣身に適し珍器堂よ充つると雖も、世の依然として悲
慘の痕絶へず、人の舊に由て血涙よ沈めり、天日出で、滿地
輝き、北風吹き來て山々枯る、天地陰陽何とさく相感應する
の徴あり、古往今來、昊天に號泣して救を呼ぶの人幾何ぞ、仁
愛の天父、豈其獨愛子の降世を惜み給はんや、是よ於てか万
民の救主イエスキリスト、天の寶坐を離れ卑しき人間の形
貌をとりにて世よ降らせ給ふ時の、今より凡千九百年の昔な
りけり、
夫れ天父の聖く義しき御方なりと雖も、又恒に万物を育し
て殊よ人間を愛し給へり、最も愛し玉ふ人にして其恩よ背

救之奥義

き、大罪に陥るの天父の御意に於て實に忍び難き所なり、義に就て云ひ罪あるもの罰せざるべからず、サレド愛の御旨に依るときの如何もして之を救はんと思召し玉ふ
あるべし、之を救ふの道如何、他なし、御子キリストを此世に降して其道を開かせ給へり、去りながら神に在りて一日の千年の如く千年の一日の如しとある譬も洩れず、先づ其地を撰び其時期の満つるを待ち給へり、其地とは何處ぞ、世界の中央に位する猶太國なり、其時どの何時ぞ、エシフトアツシリヤベルシヤギリシヤ等の大帝國すでに倒れて、今を古代文明の頂に達したる羅馬帝國開祖の時代なり、印度の釋迦没してより凡そ五百年の後、魯の孔子死してより凡そ四百七十年の後、ギリシヤのソクラット世を逝りてより

救之奥義

大畧四百年の後、歴山大王の早世よりの三百三十餘年、羅馬の雄將シーザルの暗殺されしよりの僅かよ四十四年の後に當りて聖子キリスト生れ給ふ、即ち本朝にて人皇十一代垂仁天皇の御宇に當れり、不思議や神の御子を降し玉ふに王皇貴顯の家より生れしめずして貧しき大工の家に生れしめ玉へり、母をマリアと云ひて當時の零落れて裕かならぬ暮をなせど、其祖先を尋ぬれば畏くも猶太國に其名も高きマビデ大王の苗裔にして、系圖を貴べるユダヤ人の深く榮とする所なり、而してイエスは神子にましませど世を救はんが爲よ、ワザと人の形貌をとらんとして未婚女あるマリヤの胎内より宿り玉へり、故にイエスの夫婦間に生れし普通の子女と異り、全く聖靈即ち神の力によりて正しく聖き

救之奥義

處女の胎内をかりて世に生れ玉ひしなり、創世の際も万物を造り又人間を造り玉ひし大能全智の神が、前の世も後世にも比びあき救世主を降し玉ふも當り、此特別の方法を取ら玉ふ事の毫も訝かしき次第に非ざるなり、扱イエスが壯年に成らるゝまでの來歴の二三の事の外別に著しき事もなく、只同國の男子等と全じ習慣風俗に順ひつゝ、身軀も健かに、智力、徳性、相並びて開發し、人と神とに愛せられ玉へり、學問とても大先生よ就て學べられし様よ見受けられず、又多、山中に退きて脩業せられしやうの事なし、勿論此國の例として五六才の頃より父母の膝下に在て、ユダヤ人の金科玉條とあがめたりし舊約書を學びはじめ、又日曜日毎の村内の會堂に集りて長老の教を受け、國の大祭日に父

救之奥義

母若くは親戚の者と全道して、エルサレム(首府)に上り、名高き學者等に遇ふて問答するなどの事の必ずありしなり、シカシイエスの家の富めりと云ふも非ず、又家族も多かりし故、自ら義父を助けて大工の職を爲し玉ひしならん、誰か信せん神の御子世界人類の救主が大工の子に非ずや、其母其兄弟の是を以て村人等の彼の大工の子に非ずや、其母其兄弟の我等と共に此村よ在るに非ずやと嘲りてイエスに従ひざりし然るも我々の目より見れば、是こそ最も深き神の御思召のありし所にて聖書に

彼の神の體よて居しかども、自ら其神と匹く在るところの事を棄難きこと、意はず、反て己を虚らし、僕の貌をと

りて人の如なれり

とある譯なり、讀者よ請ふ進みてイエスキリストの言行を尋ねん

救之奥義

扱てイエスは年三十にして天國の教をのべはじめ、三十三年の御年に昇天し給ひぬ、左れバイエスの御傳道の唯三年のみ、唯三年の聖業を以て昔しの羅馬大帝國を風靡し、今や五大洲到る處として基督を拜せざる國なく、全心を捧げて其弟子となれるもの幾億万の多きに及び世界の年歴をさへイエスの降誕を起本として數ふるに至らしめたり、晩年セントヘレナの孤島に在りて配所の月を眺めし佛國の大傑ナポレチンも流石に此事を感じけん一臣に謂て曰く
アレキサンドルシイザルシヤリメン又自分も夫々帝國を建てたり、左りながら我等が其力倆の基とせし何

救之奥義

かりしやと問ひ即ち武力あり、然るにイエスキリストは愛を基として其帝國を建てたり、而して只今も猶幾百万の人々が彼のため其命を献せんと覺悟せり、抑も我今日の零落と何時までも宣傳へられ喜ばれ、崇められ、而して地球の全面を掩ひんとしつゝ、あるキリストの無窮なる御治世と相隔たること幾何ぞや、キリストの死せず、益々生きんとすキリストの死の實は神の死なり
と讀者よ試みにキリスト御年齢の事を思へ
孔子曰く
人の三十にして立つ、四十にして惑はず、五十にして天命を知る六十にして耳順、七十にして心の欲する所に従ふて矩に踰へず

孔子の言ふ所の能く人心發達の理を穿てり、之を本邦の名僧に例せば、最澄の五十六、日蓮の六十一、空海の六十三、西行の七十三、行基の八十三、親鸞の九十にして逝けり、之を儒者よ例せば、徂來の六十三、關齋の六十五、白石の六十九、蕃山の七十三、仁齋の七十九、益軒の八十五にして易簣せり、但し四十餘にて早世せし近江聖人の如きの稀あり、然るに孔子が立身の年齢に於て釋迦が世を避けて山中に入りし年齢(即ち三十の頃彼の八十まで生きたり)に於てイエスキリストのはや已よ聖域に進めり、而して終始一轍たゞ天父の御意を奉じ救世の大命を傳へ其心事を窺ふに明々朗々として罪なく、邪なく、過なく、一片憂悔の痕なく、一点汚穢の影たになく、

救之奥義

救之奥義

天国の近けり汝等悔改めよ
 求めよ然らば與られ、尋ねよ然らばあひ門を叩よ然らばひらかる、ことを得ん
 夫れ我來るの義人を招くために非ず、罪ある人を招きて悔改めさせんが爲なり
 凡て勞れたる者、また重きを負へる者の、我に來れ、われ汝等をやすません、我の心柔和にして謙遜者あれ、我、輒を負ひて我に學へ、なんぢら心よ平安を得べし、蓋わが輒の易くわが荷の輕けれ、あり
 爾等もし我道に居、誠に我弟子なり、かつ眞理を識ん、眞理のなんぢらよ自由を得さすべし
 誠よ實に爾等に告ん、一粒の麥もし地に落て死す、唯一

救之奥義

にてあらん、もし死ば多くの實を結ぶべし、その生命を惜む者の之を喪ひ、其生命を惜ざる者の之を存て永生に至るべし、人もし我に事んとせば我に従ふべし、我に事る者我をる所よ在ん、人もし我よ事れば我父の之を貴ぶべし

永生との唯獨の眞神と其遣し、イエスキリストをしる是なり

斯の如くしてイエスの福音を宣傳ふ、或の數人若くの數千人のものよ教へ、又時として山腹湖畔に在りて數千人數万人の聽衆に説き玉へり、而して其言ふ所の平易にして何人にも解るやうに大概譬喩を設けて説き玉へり、天父が罪ある人間を愛して之を救ひ玉んとする御意を左の名

救之奥義

高き壁よて語られたり

或人子二人あり、その季子父に曰ける、父よ我得べき業を我に分予よ、父その産を彼等に分たれば、幾日も過ざるに季子その産を盡く集て遠國へ旅行せしが、放蕩よして其分資を皆そこに耗せり、盡く耗せしとき大ある饑饉その地に有りて、彼ともしく爲はじめければ、往て其地の一民に身を投たり、其人豕を牧ため、彼を野に遣せり、かれ豕の食する所の豆莢をもて己が腹を果さんと欲ふほどなれど、何を彼に与る人か、自ら省悟曰ける、我父の所よの食物あまれる傭人の許多か有よ、我の飢て死んとす、起て我父よ往て曰ん、父よ我天と爾の前よ罪を犯たれば、汝の子と稱ふるに足らざる者なり、爾の傭人の一人

救之奥義

の如く我を爲玉へと、即ち起て其父より往り尙とほくありしに其父かれを見て憫み、趨往其頸を抱きて接吻しぬ、子父に曰ける、父よ我天と汝の前に罪を犯したれば、汝の子と稱するに足ざるなり、父その僕等に曰ける、至も美服を携來りて之に衣せ、其指に環をはめ其足に履を穿せよまた肥たる價を牽來りて宰れ、我等食して樂しまん、是わが子死て復生、うしなひて復得たればなりとて彼等と共に樂み始む、その兄田に在りしが歸て家に近き樂と舞の音をきよ、その僕の一人をよびて是何事ぞやと問るに、僕曰ける、汝の弟歸りたり、恙なく彼を得たりしに因て爾が父肥たる積を宰りたるなり、兄いかりて入す是故に其父いで、彼に勸しかば、父よ答へて曰ける、我多年なん

救之奥義

ぢに事て未だ爾の命よ背ず、然とも我友と樂む爲よ羔をも予へし事あし、然るよ妓のため、爾の業を耗したる此なんぢが子かへれば、之がため肥たる積を宰り、父かれよ曰ける、子よ汝の常に我と共に在、また我所有の皆あんぢの屬あり、汝の弟死て復生うしなひて復得たるが故に我等喜びて樂むの當然の事あり、シカシイエスが爲し給ひし事の説教に止まらず、病者を癒し、跛者を起たしめ、盲人の目をひらき、水上を歩み、少量のバシと魚にて數千の人に飽かしめ、又三度まで死者を蘇らし玉へり、イエスの神たる事素より疑を容るべからず、曾て弟子等が己に向ひ汝の活ける神の子キリストなりと言ひしを可納し、又自ら他人に對して汝神の子を信するかと仰せ

救之奥義

又られし事あり、

その父の死し者を甦らせて生しむるが如く、子も己の意に從ひて人を生しむべし、それ父の誰をも鞠す審判の凡て子に委たり、
凡て父の我に賜し者をわれ一をも失はず、末日よ之を甦らすの即ち我を遣し、父の意あり、凡そ子を見て之を信する者の永生を得、われ復これをも末の日に甦へらすべし
是われを遣し、者の意なればなり、
と謂て自ら人の罪を赦し永生を與ふべき特權ある事を示し玉へり、以上の事よりてもイエスの神の子たること明けし、扱キリストのすでに神なれば人間に非ざるやう思ひ

救之奥義

るれど大は然らず、其肉躰の上より云へば確かよ人なり、完き人なり、万民の模範なり、人類の代表者なり、イエスの飢ゑ玉ひしことあり、渴き玉ひしことあり、又愛する友の爲に涙を流し玉ひしことありき、喜怒哀樂の情一として我々人間と異なる所なかりき、イエスの我等の如く試みられたれども罪を犯さざりき、イエスの世事を厭ひすて、深山に隠る、仙人若くは禪僧の如き者よ非ず、彼の屢々宴會に招かれて税吏や賤夫と共に飲食し、又婚禮の席にも列り、又儒者が養ひ難しとて卑むる婦女小兒までも善く待遇し玉ひたり、然るに其人となりを窺ふよ誠よ父の生み玉へる獨子の榮にして恩恵と眞とに充てり、その御威光の盛なるの日月の如く、その容貌の温和なる事の幼兒も喜びて之に近き得

救之奥義

べし、謙遜よして弟子の足を洗ひ、尊嚴よして有司學者等を
畏れしむ、而して罪汚の一点も無くして高尙き事の恰も旭
に映する富士山の如し、正よ與みし邪を撃ち玉ふよ烈しき
富貴に媚びず、貧賤を疎んぜず、終に時の學者祭司及びバリ
カイ宗の徒をしてイエスを惡むこと蛇蝎の如くならしめ
たり、そのイエスがをめ憚らずして彼等の隱惡偽善を發き
玉ひたればなり、彼等百方手を盡くして遂にイエスを捕へ
て法庭に訴へ、義人よ冤罪を負せ之を十字架に釘けて殺
せり、衆人の己を罵りて様々の惡口を吐く最中にも、天父よ
彼等の罪を赦し玉へと祈り玉へり、時に天地晦冥にして地
震あり、その傍にてイエスを眺めつゝ、ありし一兵士太息し
て此の寔よ神の子なりと云へり、今より百年ばかり前よ死

救之奥義

せし佛國の無神論者の親玉ルソーと申す人もキリスト
の死の神の死ありと白狀せり、抑もキリストの何の爲に死
し玉ひしか、人間の何爲れぞ世の救主神の御子を殺せしや、是れ
予が本篇に説かんとする救の奥義あり、
却説も祭司學者及びバリカイ宗の面々の、イエスを磔殺し
て最早敵の巨魁を倒えたれば大丈夫なりと安堵し、イエス
の弟子等師とも大將とも仰ぎ居たりし主が、無殘の最後
を遂げ玉ひしを見て愛ひ傷むこと一方あらず、周章狼狽て
此處彼處に逃げかくれ、アソヤ基督教の死灰の再燃へざる
が如き有様なり、然りと雖も正道の惡人の手よ亡びず眞
理の暴力の下に斃れず、我の生命あり、魁なり、我を信するも

義と聲すりしれ目ト朽の
 の仰ので羅て玉にはちの
 キり實に馬衆へ當死去死
 リりよ世帝人りり後らぬ
 ス聖全よ國の一山三んと
 ト賢世勝の前のたの日やと
 の多界て十よび頂よ看も
 十字しにり字立落にしよ生
 架と響汝旗て膽在て々く
 に雖さ等下りせり懸々べ
 在救れふ降太弟弟玉灰と
 り主りる服全子子への言
 キ今勿せ國等々り中きひ
 リやれりののに屢よし
 ス全と今動主遺々くりイ
 ト世宣のよけの言弟烈エ
 の界ひりり懸し子火ス
 唯のし千小とつに燃豈
 一のイ主九亞共、顯上片
 エイ百細よ天のれりの
 スエ年亞や勇にれり
 を前年の氣舉四キ
 の救のよ振百げ十リ
 奥主御我へ倍ら日ス

第 四 章

救 の 奥 義

それ殺人の爲に死るもの殆ど少なり仁者の爲に死ることを厭ざる者もやあらん然とキリストハ我等のなは罪人たる時われらの爲に死たまへり神ハ之によりて其愛を彰し給ふ今その血に頼りて我等とせられたれば況て彼に由て怒より救る事なからん乎若しわれら敵たりし時に其子の死によりて神と和むことを得たらんには況して和を得たる今その生るに頼て救ることを得ざらんや

キリストが神よして人にして神所謂神人合躰の御方なりし事ハ其中よ千萬無量の奥義を含めり神より云へば彼の獨愛子にましませり人より云へば彼は万民の救主なり彼の由りて天父の愛充分世に顯ハれ彼れに由りて人間

救之奥義

能○刑○せり、イエスを殺せしもの、彼等に非ず、夫れイエスの全智の神の御子なり、イエスにして若し死し玉ふの意な
からんか、水を踏み天に昇るのイエスのたとい千萬の軍兵
を以て追るとも決して捕得べきにあらざるなり、左れば
や兵士等に捕へられ給ふとき自ら其弟子等と謂て曰く
我々今天の十二軍を我父よ請ふて受くること能はずと汝
等思ふや
と又曰く
わが父われを愛す、そのわれ再び命を得んが爲に命を捐
るが故なり、我より之を奪ふものなし、我みづから之を捐
るなり、我これを捐るの權能あり、亦よく之を得るの權能あ
り、我父より我この命を受たり

救之奥義

左ればイエスの死の人意人力に由るに非ずして、神の深き
御旨に出でしなり、豈唯だその死のみならんや、抑も此の世
に降り玉ふや、全く天父が世の人を愛し玉ふの愛より發せ
しなり、更に進みて思ひみよ天父が其獨子を世に降り玉ひ
し所以の人類をかくまで深く愛し玉ふが故なるを、然ら
ば則ちキリストをして天の御位をすて僕の形貌をとりて
此の世に降り玉ふまで立に至らしめしもの何ぞや、即ち人
の罪惡なり、單に猶太人のみの罪に非ず、羅馬人のみの罪に
非らず、又只千九百年前の人のためのみならず、全人類の罪
に降り玉ひたり、然るにキリストの爲に此の世に
降たり、人のため、救主なるが如く均しく日本人の爲にも

救 之 奥 義

救主なり、予の爲に死し玉ひし如く諸君のためも死し玉ひしあり、嗚呼イエスキリストの我等の罪のため殺されたしき神の御前よ犠牲となり玉へり、彼の何人にも殺されたまはず、彼の自ら我等の罪のため其生命をすて玉ひしなり、イエスを天より呼び降せしもの、我等の罪なりし如く、彼を十字架に釘けしものも亦實に我等全人類の罪なりしなり、
 なり、
 点を
 の罪
 なる
 外
 キ
 リ
 ス
 ト
 の
 死
 に
 關
 係
 な
 り
 し
 云
 の
 言
 ふ
 の
 天
 の
 覆
 ふ
 所
 の
 外
 キ
 リ
 ス
 ト
 の
 死
 に
 關
 係
 な
 り
 し
 云
 の
 前
 の
 心
 の
 中
 に
 一
 点
 の
 罪
 な
 り
 し
 云
 の
 思
 ふ
 の
 人
 の
 罪
 なるか
 り
 し
 真
 上
 の
 帝
 の
 魁
 の
 あ
 ら
 ゆ
 る
 人
 間
 の
 生
 命
 の
 基
 たる
 あり、
 キ
 リ
 ス
 ト
 の

救 之 奥 義

生涯の人類の運命を解き得て餘あり、蓋しキリストを信ぜざるもの再びるもの永生に入るべし、キリストを信ぜざるもの再び彼を十字架に釘くるものなり、
 國史記して云ふ
 日本武尊相模より海を渡りて上總に赴かんとす、風濤大よ作り船艦漂蕩して進まず、弟橘媛是海神の祟を作す、
 らん、妾願くの身を以て代らんと、言ひ訖て直に海に投ず、
 風定まり岸に着く事を得たり、
 事小なりと雖も以てキリストの事蹟に比ぶべし、今夫れ神の義烈なる御方あり、人命に背き其法を犯して大罪に陥るとき、の義しき大御神の人間を罰せざるべからず、世を擧げて悉く罪に沈めり、而して罪咸く死に當るの大罪なり、神

救之奥義

の愛全人類を亡し玉ふ忍びず遂に御子キリストを降し
玉へり、キリストの人の身代りとなりて十字架に死し玉へ
り、是に於てか神の義と愛を而つかがら全きを得たり、我等
キリストの代贖によりて死を免かれしのみか永生に入る事
を得るなり、謹んで天父の深き御意とキリストの限なき恩
愛を思ふとき、その難有きこと言語に盡すべきは非ず、只
正に全身全靈全生涯をキリストに捧げて世を送るの外な
し、
キリストの愛われらるを勉せり、我等思ふに一人衆の人よ
代りて死たれば衆の人すて死たるあり、その衆の人に
代りて死し生者をして以後おのが爲ならで己に代り
死て甦りし者のため世を過さしめんとてあり、

救之奥義

抑も愛の人の生の眞理なり、身代りの愛の至極あり、キリスト宣
はく人その友の爲に命を捐つるは此より大なる愛のあし
と、看玉へ世に到る處として身代の精神あらざるのなし、母
の兒のため、孝子の親のため、忠臣の君のため、愛國者の
國民の爲に絶へず身代りになりつゝ、あるなり、此事唯人間界
にのみ止まらず、廣く生物界にも顯はる、土地、水、氣、光、熱等
常に生物の發生のため、其力を供へ、植物は動物のため、
其結果を供へ、微蟲、小禽の大なる鳥獸の爲に、其身を献じ、鳥
獸の中にも弱く、小きもの、強く、大なるもの、犠牲となる、
而して天地の諸力、諸物の悉く人間の爲に犠牲となり居
るなり、人間界に在りても、富あり、智あり、權威あるもの、貧
にして愚かあるものを、役し居るなり、斯の如く、犠牲の天地

救之奥義

の眞理なり、然るに神の此眞理を用ひて其順序を顛倒に
玉へり、即ち尊き御子キリストを以て卑しき罪ある人類の
ためよ挽回の供物となし玉へり、たとへば弟橘姫を助けん
が爲に日本武尊が自ら海に沈み玉ひしが如し、是れ實にキ
リストは始まりし新らしき身代の眞理なり、故にキリスト
の十字架の其尊貴言ふべからず、試みよ見よ、西洋の人の貴
顕王皇と雖も十字架を拜み、十字架の額などを樓上よ吊る
ま、又金銀よて造りし十字形を胸よ掛けてキリストの愛の
紀念とせり、思ひ見よ昔しの大罪の記号、苦辱の別名なりし
十字架が、かくまで尊まれ崇めらる、不思議さを、キリスト
を愛するもの、心にその十字架の實よ救の奥義よして
其中に千万無量の恩愛を含み居るなり、ポーロの有がた涙

救之奥義

に咽びつゝ、かく云へり、
爾等をして愛に根ざし、愛を基として諸の聖徒と偕よ測
る可らざるキリストの愛を知、その潤さ、長さ、深さ、高さを
識らしめ、又すべて神に満るものをなんぢらに満しめ給
はんことを、
ア、我愛する日本の同胞よ、とく來りて十字架の上なるイ
エスを見よ、彼の両手を廣げて救を受けよと呼び玉へり
ア、天地の間愛ほど芳バしきものなし、而してキリストの
十字架ほど貴き愛のあし、彼の十字架のすべて我等の罪の
身代なり、活けるキリストの只今も諸君の心の戸を叩きつ
つあるなり、早く迎へよ救の生涯の直に始まるべし、天國の
其時より諸君の心、衷に來るべし、ア、此救の福音を拒むも

第五章 救の生涯

神の死しもの、神のみならず、現世の救主なり、神の来世の救主なり、眞の宗教の翁のみの歸依すべきもの、非ず、愚夫愚婦のみの信すべきもの、非ず、又葬禮や法事や説法のみを旨とするものに非ず、キリスト教の天地の正道あり、万民の公倫なり、故に人の人たる道を踏まんと思ふもの、宜しくキリストに従ふべし、キリスト教の宇大の眞理なり、眞理の万古不易にして東西の分ちあし、人生の眞理を識らんと欲するもの、キリストは来れキリスト教の生命の教なり、救の力なり、故に

救之奥義

罪の赦と神の活力を受けて世を渡り永生に入らんと思ふもの、のキリストを信せよ、善と美と眞と義とを愛するもの、の必ず先づキリストを愛せざるべからず、夫れ本篇は説く所の救を坊主がとくところの極樂往生と全一視すること、勿れ救の現世より始まる、即時に始まる、キリストを信する其時より始まる、而してキリストの一人毎の救主あるが如く、一家一國をも救ひ玉ふべき御方なり、世は降り玉ひしキリストの千八百年の前、三千里彼邊のユダヤ國は住み玉ひたれど、靈ある活けるキリストの世の創造られざる以前より、在まし此世の終りし後、も生き玉ふべき御方なり、イエスが御昇天の前、わが凡てなんぢらに命せし言を守れと彼等に教へよ夫

救之奥義

われこの世の末まで常に爾等と偕に在り
と言ひ玉ひしに即ち此意なり、キリストの只今日本に住み
玉ふなり、否諸君の心に入らんとし玉ふなり、たとへば人が
昔より空気を呼吸して生きながら學問によりて其事を知
る日までの自ら之を覺らざりしが如し、今夫れキリストの
空気の充つるが如く日本人の心中に充てり、口を開きて其
聖靈を呼吸し得るものは幸なる哉
愛する人々よ、キリストを信じたりとて別な外面の事よの
變あることなし、キリストの諸君よ新らしき生命を予ふ、是
れキリスト其人の心中に住み玉へるなり、不善、不正、不義、不
人情等の事の雪の春光よ逢ふが如く消え行くべし、勇氣、喜
樂、平和、安心、希望、愛の泉の如く湧き來るべし、月々年々キリ

救之奥義

ストの姿其人の心中に大いあり、高くなり、明かになるべ
しツマリ、キリストの其人物を全く化して新らしき人とな
し、ひべし、卑しきものも高尚くあり、惡しき人も義を愛する
やうになり、放蕩家も孝子となり、怠惰者も勉強家となり、役
にたぬ人も天晴の力働者となり、凡人も非凡人となるか
り、是れ全くキリストの生命に由れり、而して愈々進むとき
のボーロの如く
我キリストと共に十字架に釘られたり、既われ生けるよ
非ず、キリスト我に在て生るあり、今わが肉身に在て生る
は我を愛して我爲よ己を捨てし者すなはち神の子を信
ずるに由て生るあり
と言ひ得るやうになるべし、左りながら宗教より云ふも、又

救之奥義

眞正なる學問の上より考ふるとも、人の此世ばかりにて其の運命を全ふすること能はず、更に來世にまで進み行く實に尊き活物なり、即ち榮に榮いやまして神の形貞よ變はるなり、而して此靈軀かぎりなく神の國にて聖き生涯に入るべし、現世にて神の子供、キリストの忠僕とあり、來世にての義人聖者の列に入る、ア、是れ之を救の生涯と云ふ、而して此生涯に入るの門の罪より免かる、に在り、贖罪の道キリストの外に斷じてなし、救の奥義キリストの十字架の外にたへてなし、諸君若きも、老たるも、とく來りて此新らしき生命に入れよ、此救の奥義を覺るもの、幸福なるかな、幸福なるかな、

明治廿六年四月十日印刷
明治廿六年四月十一日出版

著者

村田勤

京都市上京區河原町上切通五十一番戸

發行兼印刷者

今村謙吉

大坂市西區土佐堀三丁目卅八番屋敷

印刷所

福音社

大坂市西區土佐堀三丁目

發行所

福音社

大坂市西區土佐堀三丁目

賣捌所

警醒社書店

東京市京橋區出雲町

各府縣賣捌所

全 老松町	岡本光盪堂	全	一二三書店
大阪京町堀	吉東書店	全	メソデスト出版社
京都今出川	クリスチヤンポード	全	聖公會書類會社
仙台新傳馬町	大塚書店	東京々橋區	十字屋
函館相生町	福音舍	備前岡山	復生堂
橫濱地藏阪	福音舍	大阪新町	矢部晴雲堂
神戶元町	福音舍	大阪新町	

全 日本道德基督教
 全 基督教條約改正
 全 天啓教と聖書
 全 婦人立志編
 全 立志之礎
 全 保羅之傳
 全 羅之傳
 全 保羅之傳
 全 羅之傳

定價 五十錢 郵稅 四
 定價 八十錢 郵稅 五
 定價 一百錢 郵稅 六
 定價 一百五十錢 郵稅 七
 定價 二百錢 郵稅 八
 定價 二百五十錢 郵稅 九
 定價 三百錢 郵稅 十

各府縣賣捌所

神戸元町	福音舎	大阪新町	矢部晴雲堂
横濱地藏阪	福音舎	備前岡山	復生堂
函館相生町	福音舎	東京々橋區	十字屋
仙台新傳馬町	大塚書店	聖公會書類會社	
京都今出川	クリスチヤンボード	メソヂスト出版社	
大阪京町堀	吉東書店		
全 老松町	岡本光鹽堂	全	一二三書店

内村鑑三君著 ● 肖像 入 コロムブスの傳 定價 十五錢 郵税 四錢

内村鑑三君著 ● 基督信徒の慰 定價 二十錢 郵税 四錢

横井時雄君 合著 ● 日本の道德と基督教 定價 八錢 郵税 二錢

原田助君 合著 ● 基督教と條約改正 定價 十錢 無遞送料

某先生立案 ● 基督教と聖書 定價 八錢 郵税 二錢

竹中勇氏筆記 ● 天啓教と聖書 定價 八錢 郵税 二錢

エール大學教授博士
フイツシヨル先生著 ● 婦人立志編 定價 二十錢 郵税 四錢

横井時雄君譯 ● 婦人立志編 定價 二十錢 郵税 四錢

德富猪一郎君序 ● 婦人立志編 定價 二十錢 郵税 四錢

竹越竹代女史編 ● 婦人立志編 定價 二十錢 郵税 四錢

海舟伯題字 ● 婦人立志編 定價 二十錢 郵税 四錢

松村介石君著 ● 精神的教育 定價 二十五錢 郵税 不要

松村介石君著 ● アブラハム、リンコン傳 定價 二十五錢 郵税 不要

松村介石君著 ● 保羅之傳 定價 三十錢 郵税 六錢

松村介石君著 ● デビニチー 正價 十五錢 郵税 二錢

瀬川淺君譯 ●設氏說教學 定價四十錢 郵稅八錢

村田勤君譯 ●保羅の改信 定價六錢 郵稅二錢

竹越與三郎君著 ●基督傳記 近刻

平岡希久君著 ●大觀 定價八錢 郵稅二錢

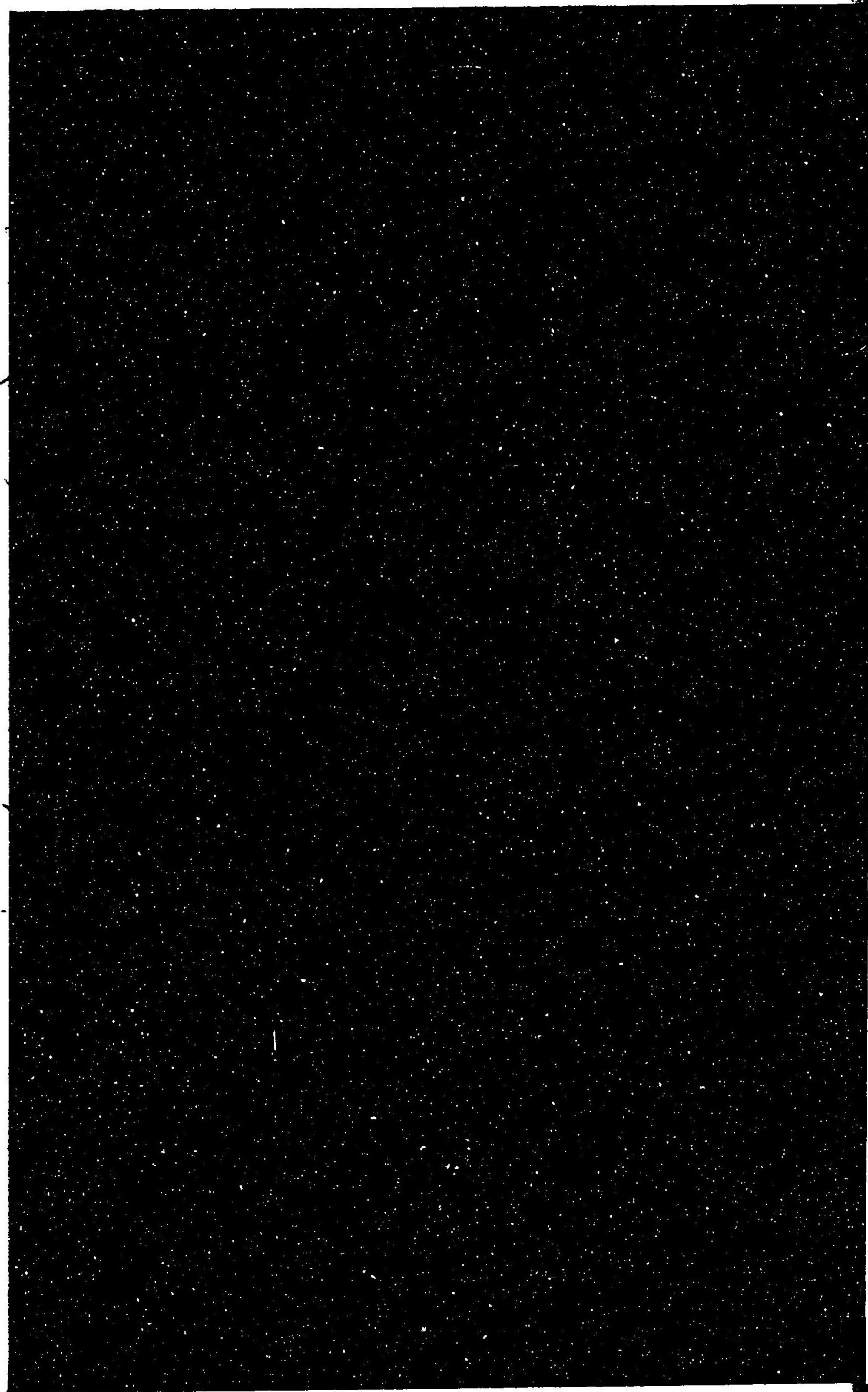
●本郷會堂 ●學術講演 定價八錢 郵稅二錢

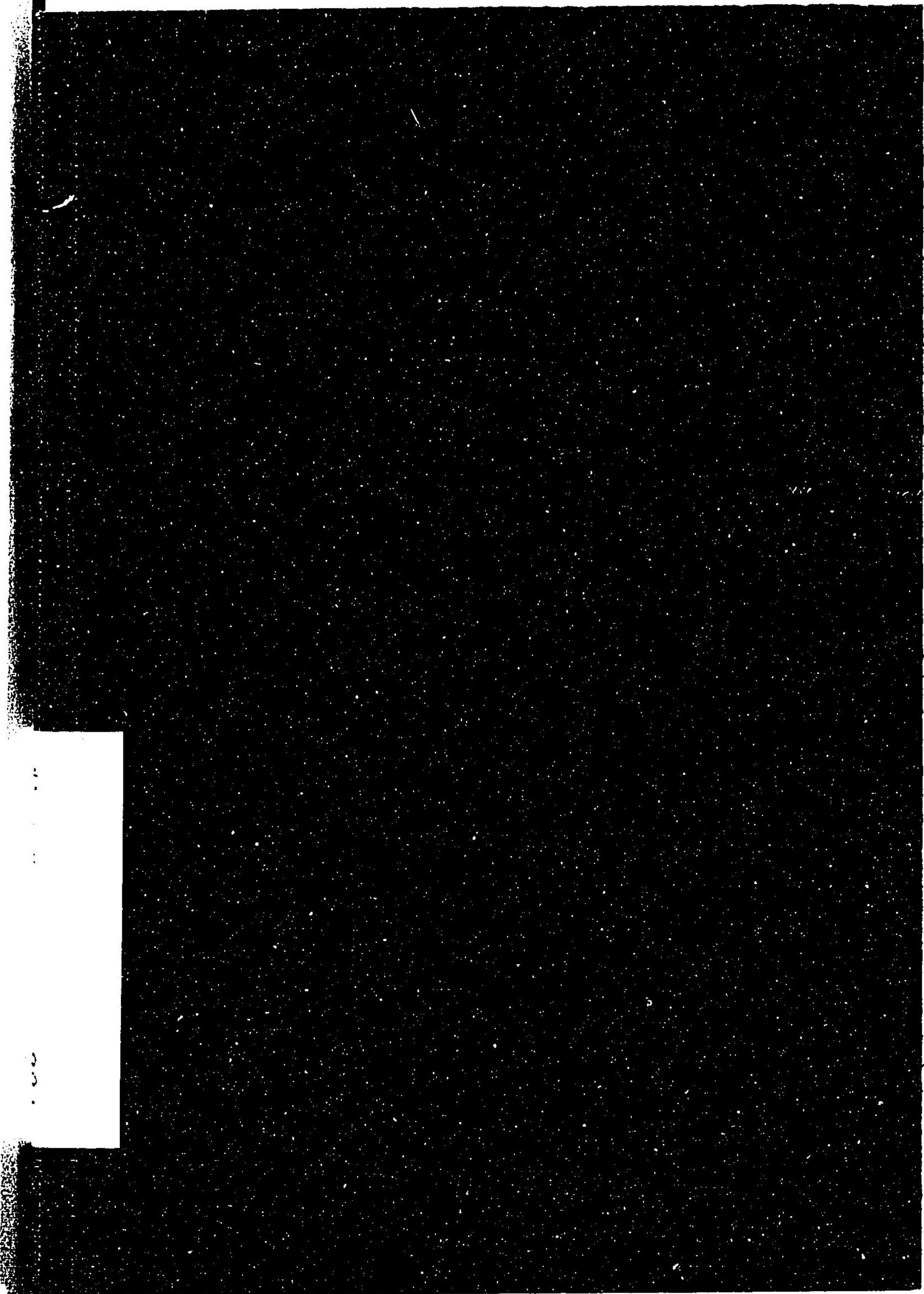
素軒逸史著 ●ルールの傳 定價六錢 郵稅二錢

マツロー氏著 ●育幼草 定價二十錢 郵稅四錢

本間重慶君 ●教札綴字 定價十五錢 郵稅四錢

全 ●教札綴字 定價九錢 郵稅二錢





3
3

特46

891

救の奥義

国立国会図書館

020855-000-4

特46-891

救の奥義

村田 勤/著

M26

ABI-0686

